

座談会：『宗教理論と宗教史』番組を めぐって

出席者	主任講師	柳川啓一
	〃	阿部美哉
	担当ディレクター	内田安昭
	司会	好本恵
	学生	田村徳章
	〃	藤原聖子
	座談会司会	島田裕巳

1. コースチームというアプローチ

（司会「島田」）今回、『宗教理論と宗教史』の教材作りを、コースチームということでやったわけです。今まで、「コースチーム」で作ることが必要であるとか、作るべきであるという声があったわけですがなかなか実現しなかった。そういう点を含めて、この全体のプロジェクトの意義を、阿部先生にお願いします。

（阿部）遠隔教育は、かなりいろんな経験があって、手法が開発されてきているわけです。ひとつは、コレスポンドンス、通信教育の伝統の中から出てきているのがある。通信教育の伝統の中から出てきて完成した形になったのがイギリスのオープン・ユニバーシティを中心とするものだと思います。それから、もうひとつの流れは、放送を主体にしてくる流れでして、このリーダーは、一面NHKであり、一面はBBCだろうと思うんです。それから、もうひとつは大変新しいんですが、1980年代になりまして電子通信メディアをいかに活用するかという問題がある。そういう3つの流れが接点をもってくるのがパッケージという考え方だろうという感じがするわけです。そこで、3つの背景のどれに重点を置くかということを別といたしまして、パッケージの要素として基本的に考えられていますのが、まず印刷というメディア、その次に音声というメディア、それから

3つ目に映像というメディア、それから4つ目にインターアクティブという問題意識。この4つの組合せを独立にではなく、総合的に効果のある遠隔教育方法に使っていくためにはどのような手法が必要かということで、いろいろな研究があり、それぞれの伝統ごとに関発がなされてきたわけです。そのひとつのやりかたとして、コースチームというアプローチがある。それは4つのアプローチについてブレンドストリーミングをかさねながら統合し、学生との関係をも作っていくという考え方なんです。それに対しまして、もうひとつの考え方は、これを大学教育としてとらえるものです。主になる講師の意図が忠実に伝わるようにすべてのメディアを利用する。印刷というのは著書であり、音声というのは講義。映像というものはそれを補強するための補助あるいはモチベーション。インターアクティブ、これは基本的にいえば演習ではないか。そういう教師主導の考え方があるわけです。

ですからコースチームのアプローチというのは、ある意味でいいますと、そういう4つのメディアを同列において、それをインテグレートしていくという考え方です。もうひとつの教師主導型というのは、大学というものを遠隔に届けようというものです。われわれがこれを企画しました時にはそういう2つのアプローチがあることを前提におきながら、ひとつ実験としてパッケージにインテグレートする方法をコースチームというアプローチでやってみる。それぞれの分担者が対等の立場に立って、ぶつけあわせながら作ってみようということを考えてみたわけです。ただし、ただぶつけあって作るだけではなく、受け取る側からも参加してもらって改善する。したがって、今回、これを作っていく時に、その宗教理論、あるいは宗教学という考え方の基本線は柳川先生にお取りいただいた。それから、また映像を作っていく責任者である内田さんも同列の場においてバラバラにしてしまわない。それから印刷メディアを作る時には、コースチームを作って柳川先生の理論そのものをただ印刷するというだけでなく、それがどうやれば理解できるかということを一種の演習形式を通してわかるようにしていくのではないか。ただ学生と教師ということではなく、メディアに参加している人達が

全体でどうやってまとめているかということでコースチームというものを考えてみたわけです。

(司会) 1つだけ質問なんですけれども、コースチームが今まで日本でできなかった原因はどこにあるんでしょうか。

(阿部) 一番おおきな理由は費用だと思います。その次の理由は、意識だと思います。実際には全然無かったかどうかといいますと、通信教育の方では、たとえば玉川大学とかである程度の実験が行われておりました。けれども、それが広がらなかった一番大きな理由は費用、それから玉川大学なんかでやったコースチームの実験というのはイギリスのまねをそのまましようとした。日本のもっている素材、コースチームの素材、われわれの場合には研究室というひとつの母体があり、それからまた放送教育開発センターというディレクター集団も一緒に入る。それからまたNHKがらみ、それからまたほかのかたも入っていただけるといふものがあったからできたので、そういう点では日本の既製の大学の組織だとなかなかやりにくい面があるのだと思います。

2. 新たな試み

(司会) 以前の『宗教理論と宗教史』は、柳川先生のストレートトークという形の番組であったわけです。今度は、柳川先生にお伺しますけれども、今回と前回、主任講師という立場でやってみて、一体どういうところが違うのか。今回の柳川先生の意図どおりにすすんだかはわかりませんが、その点を含めてどうでしょう。

(柳川) 前回は、ご承知の通り、ストレートトーク、つまり大学での講義の形式をテレビで映すということですね。これは13回私がやりまして、2回阿部さんがやりました。その時は、阿部さんが放送教育開発センターの職務にお就きになるとは夢にも考えないでいたものですから、今度のコースチームというアイディアは非常に新鮮で、阿部さんから多くのアイディアをもらったわけです。前も、45分やれば見ている人は退屈するということはわかっているんです。けれども、それにはどういう方法があるのかというと、結局、絵かグラフかビデオとか、関

連したものを多く入れて、そこへ目をそらさせるということですね。ですから大学の講義とはちょっと違うわけで、なにかものを入れていこうということで苦労したつもりだったんですが、やはり材料に限界があり、それから結局自分ひとりの独断になってしまふ。コースチームというものの特徴をいえば、形式も非常に独特ですけれども、形式より前に、題材は私のテキストがもとになっている。テキストはもとなんですけれども、コースチームというのは、主任講師がおり、それからゲスト講師がおり、それから担当リポーターがいて、それから、今度は聞いて質問する人がいるというように、幾通りにも区別されているわけです。その気が合い、聞きやすかったなら、今度のコースチームは成功したといえると思います。しかし、我々の中に入っているものですからわからないですね。ことに、ゲストを入れるのが通例であった点が特徴であったのではないかと思います。自分の言うことを聞いてくれそうな人ばかりではなかったですね。

(阿部) それは、インターアクティブということ考えた時のひとつの要素なんです。一方的に流れてしまうのでなく、反対するようなものを入れる。すると第三者の方にもインターアクティブな関係が出るのではないかというねらいは持っていたんです。

(司会) くわしい話はまた後にいたしまして、今度は内田さんにお聞きしたい。実際に始まる前に何か懸念をお持ちだったということをお聞きしているんですけれども。

(内田) 番組の内容をいろいろ検討したり、企画の段階で学者の方とかブレーンの方といろいろ内容を検討するということはしょっちゅうやっていることなんで、経験はあるんです。しかし、今回のコースチームというのは、それと似ているようでやはり違っていたわけです。コースチームというのは前からいろいろ聞いていたんですけれども、いろんな方のいろんなイメージといいますか、これがコースチームだという概念もない。初めてやってみて、全体としては試行錯誤的なのところが全員にあっただろうという気がします。今、柳川先生も言われたんですが、出来上がったものが果たしてどうなのかという自信は私にもまだ無いん

です。ただ最初の試みとしては、おもしろかったのではないかと、有効ではなかったのか。コースチームというものをつかみかけてきた。この次やったならば、他の方たちもこれを参考にして少しずついいものになっていくのではないかと気がするんです。演出を担当した立場で言えば、比較的メンバーに若い人達が多かったものですから、そういう意味で新鮮なというか、ある場合には大変勝手な意見がいっぱい出てきて、それなりにたいへん楽しかった。ただ、制作するにあたっては、このスタジオとか技術的な問題で制約が多く、苦労はあったわけです。放送大学の番組が他にたくさんありますけれど、15回とおしてクレーンを毎回使ったとか、マイクロホンを毎回10本以上も立てるといふ番組はこれ以外にはないだろうと思うんです。そういう意味で技術スタッフなんかも一生懸命、それこそ試行錯誤というか、コースチームということの意味はチームが集ってプランニングをした以外にも技術スタッフとか、あるいは取材に行ったアシスタントのディレクターの諸君とか、みんな含めてひとつの成果があったんだろうと思います。

ひとつ、これからの課題だと思われるのは、放送大学の講義番組は普通の番組と違うと僕なんかは思っているんです。しかし、さっきもでておりましたようにテキストと番組との関係とか、番組とはどういう性格を持つものかということは、他の方も柳川先生、阿部先生も含めてつかめていないところがあるんです。講義として学生諸君に知識を伝達するものなのか、それとも学生諸君の自主的な学習意欲を高めるというか、つまり面白くて興味深い内容にして、覚えたり勉強したり学生諸君が自分でテキストとか参考資料を読んでやっていくのとかで、番組の作り方が違ってくると思うんです。どちらかといえば後者の学習意欲を高めるということに力を置いたつもりではあるんですけれども、全体をとおして見ると、迷いというか不十分なところがあったというか、これで果たしていいのかということですね。この次作ったら、もっといいものが出来るだろうと思うんです。第1回のコースチームのテストという形では、やっていたたいへん楽しかった。それなりの成果は評価できるのではないかとすることは感じます。

(柳川) 今回のテキストは、私の文章が若い諸君の文章には含まれているという非常に面白い形になっているんです。このようにしたひとつの理由は、スタイルは阿部さんが考えたんですけれども、この前やった時に、私が教科書を読む形でやった。ただ印刷されたものを読んでいるだけではものたりないという批判をされた方もありますものですから、テキストの別の形というものをだそうとしたわけです。

(阿部) これは、実験してみまして批判がたいへん強かったということがひとつの理由なんです。それからもうひとつ私が考えましたのは、学習のプロセスを援助するインターアクティブなものでないといけないということです。先生はいないんだけど、制作した映像があり制作した本があり、今出ました学習をする部分がある。受身に見たり読んだりするのではなくて、学習する人が参加できる方法はある一体なんだろうかということで、ああいうフォーマットを考えだしてみたいんです。それがうまくいっているかどうかというのは、学習してくださっている方のご意見をいろいろ伺ってみる必要があるような気がします。

3. 司会者として、生徒として

(司会) 好本さんには司会者として参加してもらったんですけれども、もともと宗教学ということとは全然関係なかった。内田さんにつれてきていただいたんですけれども、僕らとしては好本さんに助けられた部分というのがものすごく多かったような気がするんです。実際にアナウンサーとしていろんな番組に出ているらっしゃるわけで、そういう経験が豊富だと思うんですが、そういう経験から考えて、今回のものというのはどういうふうに写ったか、あるいはどういう点で苦労し、どういう点で面白かったかということをお話していただけるといいと思います。

(好本) テレビで実際に見ている方には、講師の先生がいらっちゃって、聴講生のみなさんがいて、ゲストがいらっちゃって、司会がいるという形というのは、それほど新しくはないと思うんです。でも、私は、番組を制作する段階になって途中参加をさせていただいたんですけれども、これはちょっと違うなと思ったん

です。テレビに出ている部分というのはいわば氷山のちょうど海面から出ている部分で、その海面の下の部分の大きな部分がとってもユニークだなと思ったんです。私自身の感想とすればその海面の下の部分、例えば皆さんが印刷教材を作ったり、テスト問題を考えたり、アンケートを取ったり、あるいは東京大学の柳川先生の研究室に行って打合せをしたというのは最高に面白かったし、ああいう経験はまだ一度もなかった。どうしてそんなに面白いのかなと思うと、誰も彼もが渾然一体となって、作る喜びというのかしら、皆目見当もつかないけれども、とにかく作り上げてみよう、宗教学にシロウトの人にも何かひきつけるものを作り上げてみようときっと皆さん思っていたんだと思うんです。そういうものが番組に出たかどうかわからないんですけど、表面に出ない部分で非常にユニークだったと思うんです。ある時、他の方にお話したら、「それが番組にでるといいね」とおっしゃっていたんです。コースチームのみんなで作りに上げていく、そのままの勢いが番組にそのままの勢いが番組にそのまま出て、それが生徒の皆さんに伝わればいいんですけど、そこまでいったかどうかはわからないんです。

今までの番組、放送大学の番組の中でも非常にユニークだし、また普通のテレビの番組というのは、ディレクターの方がいて、アナウンサーはその指示に従ってゲストの方にうまくお話をさせていただくように誘導するというシンプルな形なんですけれども、今度の場合は違うなと思いました。だから、私自身の立場が非常に違うという感じがしました。内田さんにお話をいただいた時は、とにかく人数が多いんで交通整理の役をお願いしますとおっしゃった。確かに人数は多いし、それからこれは後で思ったことなんですけれども、宗教学というのは広範囲ないろいろなものをふくんでいる。柳川先生もおっしゃったように民俗学とか文化人類学とか社会学とかを含んでいる。それに日常的な面で、広範囲なものでしょう。そういうものを含んでいるなかで交通整理の役というのはできるかどうか心配なまま始まったんですけども、実は交通整理の役としては時間をキープすることくらいで、私自身がしたことというのはまったく他の方が専門家でいらっしゃったから余計にそうだと思うんですけど、まったくシロウトだし私自身が一番の生徒

だと思うんです。そういう意味である時は交通整理の役を忘れて、信仰治療だったと思うんですけど、おもわずのめりこんで、すっかり次に何をするか忘れたんです。すごくおもしろかったんです。私自身だけかと思ったのですが、小野先生の時に、専門家でいらっしゃる若手研究家のみなさんとか柳川先生とか阿部先生まで、いや今日の話は初めて聞いた話で関心したとかおっしゃる。シロウトの私ばかりじゃない。本番の番組の最中に発見があるなんていうことは、そういうことってめったにないことですね。その時、本当に感激しました。そういう意味でも私の立場は非常にめずらしい立場というか、どうしていいかわからないままとにかく楽しくて、終わる時には非常に寂しかったです。

宗教学ということに関しては最後まで結局シロウトでした。でも、非常に乱暴な言い方をすると、「日本人の宗教」から始まって「現代日本社会の宗教」で終わった。そういうことを考えてもわかるように、柳川先生の宗教学というのは日本学というか日本人学だなと思ったんです。私は日頃迷ったりしていることとか、ちょっと抵抗があるなと思うこととか、どうしていいかわからずにしてしまっているようなことが、宗教学を柳川先生の方で少しずつ自分なりに勉強すれば、あるいは人に流されずに、もうちょっと生きられるんじゃないかと思います。例えば具体的な話をすれば、七五三とか成人式とか妙に派手になったりするでしょう。世の中全体派手になをと、みんな一斉に派手になる。でも、その宗教的な意味とかをもう少し冷静に勉強したら、こういう背景があって、こういうものであるから、この行事をこうとらえようとかいうことができると思ったんです。だから、宗教学というのはまさに日本学だなと思って本当に面白かったです。

(司会) 特に、15回目とかいうのはどうでしたか。

(好本) いや、あれはまいりました。交通整理も、ゲストがユニークな方だったり、時間その他を一切考えない方がいらっしゃいますと……

(司会) 勢いという意味では15回目というのは、さっきのお話でいけば一番あったような気がするんですけど。

(好本) だから、もう汗をかくというか、緊張しておさえぎみで、充実した15

回でした。

4. 宗教学を学ぶ

(司会) どうも、ありがとうございました。続けて、学生の立場として田村さんと藤原さんに出ていただいたんですけれども、田村さんはサラリーマンの代表。放送大学の学生が働きながら、しかも、かなり年令が上の方が多いということで、その代表として一家で出演していただいたんです。それから、藤原さんは宗教学の学部の学生ということで、そういう人にも参加してもらったらどうかとこちらでかってに選ばせていただいたんです。参加していただいてどういう感想をおもちになったか。

(田村) 僕の立場はコスチュームその他については何も知らない。いきなり来て、今日は何をやるんだと初めて聞いて、スタジオに行き、そのまま放送に入るわけです。リハーサルは一回あるけれども、初めてビデオなど見るわけです。初めて話も聞くし、そうするとほとんど放送大学の視聴者の立場に近かったのではないか。自分はそこにいて、ちょっとしゃべったりはするけれども、立場としてはそんなものだ。そういう意味で目を皿のようにして見たりということがあって毎回面白かったです。それからもうひとつは、宗教学というのも初めてで、柳川先生、阿部先生のお話も初めて聞くことばかりで、これもまた放送大学の学生と同じ感じで聞いていたわけです。

それから、僕は40代ですけれども、40代の男の勤め人なんていうのは、およそ放送大学の学生として非常に少ないんじゃないのかと思うんです。それは、一番テレビ視聴ができないセカセカした連中だと思っんです。その仲間に聞いてみたのですが、一回、おそらくさっき好本さんが言われた信仰治療だと思っんですが、ものすごく面白かったと言っんです。また見るとか言っって、僕が出ているとか、頭の後ろが見えるとか、そういうことに関係なく講座自体が面白いと言っんです。だから、おそらく非常に有効なことになっているんじゃないかと思っんです。ただ先程、先生方が言われたように、非常に成功だったかどうか、つまりよくできたかどうかというのは、宗教学の講座として学問的に高い水準にいったか

らなのか、それともみんなが見てくれるということを指しているのか、よくわかりませんが、少なくともふだんとつきにくい宗教学というものを1回ちょっと見ただけで、もう1回見ようかという気になってくれた人は多いんじゃないかと思うんです。そういう意味では、学問という型においても、それで良かった、いいんじゃないかと思うんです。もちろん改善するところはいっぱいあるんですけど、一視聴者として見れば、たいへん良かったと思います。これはいつも考えるんですけども、結局、[！][！][！]ださいということと面白いということ、必ず両方ないとどうも嘘くさくて、あんまりださいとどうも眠っちゃう。その二つがうまくバランスがとれてたところが良かったんじゃないでしょうか。

(司会) どうもありがとうございました。では続けて藤原さんの方から。

(藤原) スタジオの学生として参加して、いつも2つの立場を意識していました。1つはテレビの前の視聴者と同じ聴講生という形。もう1つは、一緒に番組を作っている制作者としての立場。その2つを意識して参加してきたんです。まず普通の視聴者の方と同じように講義を受ける。ふだん大学のほうで、柳川先生の講義を受ける時とどう違うかということは、大学での講義だと狭くはなるけれども非常に深いところまで、柳川先生からいろんな知識を与えていただけるといういい点があると思います。放送大学のこういう形だと、たいへん範囲としては広くなる。いろいろ勉強できたというか、その分浅くなったんですけども、浅いというところとちょっと具合が悪いかもしれませんが、それが視聴者の主体的な勉強の意欲を起こさせるという面につながるというか、私自身いろいろと広い範囲で新しくどんどん問題意識をかきたてられたという非常なメリットがあったと思うんです。それから、これは個人的なメリットになってしまうかと思うんですが、毎回ゲストの講師がいらっちゃって、今までは著書でしか存じ上げなかったような先生方に実際にお会いして、お話ができた。それでイメージがガラッと変わって、新しいイメージを受けたような先生方も大勢いらっちゃったので、自分としては大きな体験だと思うんです。そう考えてみると、テレビでこれを知っている方々も実際に映像を通してでも、いろんな先生を拝見できるということは、

ただ本を読んでいるだけとは違ってかなり大きいんじゃないかと感じられたことです。それから、一緒に番組を作っている制作者の立場として感じたことは、何といっても質問の難しさというのか、聞いている人の立場として自分の私的な関心に合わせて質問をしているのか。最初はただ気楽に感じたことを質問すればいいと思っていたんですけども、やはり教材としての番組の性格を考えた場合に、もっと聞いている人にも、みんなで問題を共有できるような質問をしなくちゃいけないんじゃないか。それを考えだしたら、たいへん質問するのが難しくなってきた。それで毎回かなり考えてしまうことも多かったんです。自分としてはそういうふうに考えて、『宗教学辞典』の該当する項を見てみましたが、やはりそれでは足りなかったようです。希望を言えば、先にテキストを読んでそれで参加できたらもっとそういう立場にうまく立てたんでないか、そういう感じがします。

(司会) そうですね。ただ、全くテキストと独立して事が進んだ面の面白さみたいなものもあるのかもしれない。

5. テキストとテレビ

(阿部) パティシパントを二種類にしてあるわけですね。テキストをずっと作るのに参加して、内容について理解している人と、視聴者代表的な意味で、フレッシュな形で参加していただく方というのがあるものですから、もしそれが玄人っぽい質問ばかりになると多分、視聴者とのインターアクティブな関係が悪くなるんじゃないかというんで、ある意味では意地悪な下心があったんです。もう一つ、今、田村さんや藤原さんの御指摘があったんですが、遠隔教育手段として見た場合に、印刷物がコア・メディウムであるのか、それとも映像、テレビがコア・メディウムであるのかというのは非常に大きな問題なんです。今回の場合には、これを fifty-fifty にとって考えてみた。質の違うものというふうに考えてみたわけです。ですから学習意欲をかきたてる、材料を提示する、そういう意味で、モチベーション・ファクターとしてのコア・メディウムとしてのテレビというものと、それから知識というものを深めていくための印刷教材というものをクロスに考えて、接点はあるけれども、展開も目標も印刷教材部分とテレビ部分と

いうものを縦横の関係に組んであるから、内容的にはちょっと触るだけで、ほとんど違うんです。印刷教材とテレビ番組、ただテーマの部分でクロスして片方は自分で問題を掘り下げて考えていただくための材料。印刷物を使って自分で問題を考え、問題を解いていただくという概念、そのなかに定説的な解説部分、これは柳川先生にお書きいただいたものがあるわけです。そういうものと、今のモチベーション・ファクターとしての部分として組んでみたんですけれども、果たしてその通り動いているかどうか。もうちょっと試験なんかやってテストをしてみる必要が残っているんじゃないかと思っているんです。

(好本) 勉強の仕方というのは、最初、阿部先生から説明していただいて、また時期があったらいつか番組の途中で是非ご説明いただきたいと思いつつ、ふんだんな内容と沢山のゲストでとてもそういう時間がなかったんです。勉強の仕方というのはやはり相当しっかり捉えていないとつまらないですね、せっかくの内容が。私も司会の時につけやきばで...

(司会) よく勉強してましたよ。

(好本) いえ、とんでもない。先生が後のところに書いている参考文献を見せていただいた時には、面白味が全然違う。だから今先生がおっしゃったような横の線と縦の線、その縦の線は印刷教材だけでなく参考文献とか、専門家なら絶対読んでおかなければいけない常識的な本とか、そういうものがやはり縦の線で、太く縦の線がないと深まらないと思います。

(阿部) それでたいへん面白いのは、我々がそこまでいけるかどうか、また次の課題ですけれども。アメリカで我々と似たような試みをやっているところで、とっても面白いところがあるんです。それは物理の番組で、かなり高度ないい番組です。印刷教材は初年度用とフレッシュマン・ sophomore・レベル用と、専門用、ジュニア・シニア用と別になっていて、まるで違いますが、テレビは全く同じです。そういうアプローチもありうるんですね。モチベーション・ファクターというものと知識を深めていくものと切り分けて考えれば十分可能なアプ

ローチのはずなんです。

(司会) それは面白いアイデアですね。藤原さんが、質問するのが途中から難しくなるとおっしゃってたけれど、僕なんかから見ていると、それぞれの学生の方が、僕が勝手に選ばせていただいたんですけれども、その意図どうりで非常にユニークというか、それぞれに個性があって、途中から自分がどういう役割であるかということ認識したんじゃないかと、それがあったと思います。

(田村) そうせざるをえないというか、手の広げようがないわけですから、どうしても学生というか、僕はサラリーマンの学生という立場になっていくわけです。その立場からの質問しか当然できないこともあるし、役割を認識したというか、自然に型がきまってきた。

6. ゲストという存在

(司会) その分、ゲストの方に対して最後の方では申しわけないことになったという気がするんです。ゲストの方というのは、途中1回だけ出てくるわけです。そうすると、今まで10回なりやってきたことを全然知らない。そこにボンとよそ者がやってきたというか、何かおまえさんはよそ者ですよという扱いになったような部分もあって、それは致し方ないというか、かえって面白いとも思うんです。好本さんはそう感じませんでしたか。

(好本) 私はむしろみんなで迎えたという感じで、ゲストの方に直接伺ってみたいからその気持ちの部分はわかりませんが、そんなに違和感はなかったです。

(内田) ゲストを迎えるということはコースチームで検討して作ったプランだけれども、ゲスト自体は参加していないわけで、いい方をお呼びするとどうしてもお忙しい方が多くて、打合せも不十分というのありました。ゲストの方と打合せをきちんとするべきだったというのは反省点としてあります。場合によっては、特に遠くからお呼びした方などはぶっつけて、打合せということもありました。

(好本) その1回の部分については、ゲストの方も制作者の方と一緒にって作り上げる制作手法もあったかもしれません。10分なら10分のコーナーをおま

かせして。

(内田) コースチームのプランニングとしては、こういう案の中に、こういう型のゲストをこういう形で入っていただこうと、コースチームの中ではゲストの方は一つの素材みたいに扱ったわけで、そういう意味ではねらいどおりというか、だいたい意図したとおりになったと言えるんじゃないでしょうか。ゲストの方がコースチームの一員としてスタッフになっていただくという考え方もあるんですけども、今回はそれはちょっとできなかった。

(阿部) できなかったのと同時に、これはある意味で言いますと、なあなあでない、違う学説とか、違う経験というもので刺激を与えようという意図があったものですから、そういう意味で、ゲストの方に対して失礼というのは島田さんの言う通りかもしれないわけです。

(司会) 刺激的ではあったと。

(阿部) 刺激的にはなります、なつたと僕は思っている。実を言いますと、実験番組をずっとやってきた時に、いろんな人を入れてくるのではなく、なるべく1人の先生で通した方がいいという一つの説があったんです。それはチャレンジしてやろうと、それでは1つの流れになってしまって、学問というのは決してそんなはずはない。いろんな説のぶつかり合いの中から形成されていくものなんだから。

(好本) それにしてもやはり柳川先生でないと出来ない、あれだけの人脈というか、柳川軍団というか、私は全くすばらしいなと思いました。もちろんチームに加わった若い方々もですけども。

(田村) それと、もう一つ、テレビというものは講師の先生の人柄というか、そういうのがもろに出るんです。それが今度の講座については非常に良かった。良かったと言ってもしょうがないですけども、非常に暖かい感じがあって、さっき好本さんおっしゃったように、去りがたいという感じにつながった。この講座全体がそういうムードというかトーンを持った。これはたいしたことではないかもしれないけど、全体を通して見ればそういうことを感じられる。それが宗教

学に興味を持たせるコツになったりするかもしれません。

7. もう一步突っ込んで

(柳川) 田村さん、藤原さん、何か質問を通してもっと突っ込みたいというところがおありでしたでしょう。やはり、一問一答で終わってしまうところもあったでしょうね。

(田村) そうですね、あまりプライベートなところへ突っ込んでばかりでは。

(藤原) 視聴者としてどのくらいのレベルの人を予想したらいいのかという気持ちがあって、それをどのくらい玄人っぽいというのか、どこまでもっていいのか、あるいは全然知らないというのを前提にして話すべきなのか。そこらへんがまた難しかったところで、実際に聞いた方にいろいろ反応をうかがうよりしょうがないと思っています。

(田村) 宗教学を理解できたかどうかということですが、これは「ノー」といわざるをえない。ただ、テキストを、番組の収録が終わってからいただき、中の問題をチラチラと見ました。「日本の人口は何人ですか」なんていうのは答えられるけれども、その後がちょっと。よほどテキストを読みこまないと答えられないようになってるんじゃないかと思うんです。テレビを見て喜んでいるだけじゃなくて、すこし勉強してみないと合格しませんとなっている。

(司会) それからレベルという問題でも、いろんな人がいて、放送大学の学生の中でも何となく勉強してみたいというのと、ある分野を突っ込んで勉強したいという人がいるようです。突っ込んで勉強する人にとっては、単に刺激ということではなくて、後に出てくる参考文献で勉強するようになっていく。それがきっかけとなって、また勉強して、もう一回この番組を見てもらえば、また違うふうに見えてくるんじゃないかと思うんです。ぼちぼち、外の人感想を聞いていると、どっかのおばあさんが他の番組より面白いと言っているとか、宗教学の専門家の先生が見て、それなりにおもしろいというふうに聞いたんです。だからレベルがかなり違う人でも、それぞれの立場で見ると、何かおもしろいと感じるものがあれば、勉強になるという面はあるんじゃないか。だからレベルというのは、あ

まり実は問題でないと思うんです。

(阿部) ただ、構成から言いますと、もし参考文献全部読むと、やはり大学の教養課程程度と考えていいと思います。それから問題をきっちり読んでいただいて全部答えていただいたとしますと、やはり専門課程に相当する勉強量になると思います。それは、見た目はやさしいけれども、まともに考えていただくと、相当大変でして、問題を作った人間が間違ったりした。

8. 映画と学習

(内田) 映像の特性として、分かりやすいとか、興味深いということはあるわけで、例えば、結婚式だとか、お祭を見て、お年寄の方がおもしろいとか、何となく宗教的なのというところもあると思います。その意味では映像は、同じ場面でも、見る方によって、その人なりの受け取り方なり解釈なりが出来る。ただ、コースチームのスタッフのプランとしては、もっといろいろ映像も入れたいという要望があったんです。現在のところでは、一生懸命に集めても、あの程度しか入れられなかった。特に外国の貴重な宗教的なフィルムはあったけれども、値段が折り合わなくて、使えないとか、そういうものもかなり実はありまして、残念だったんです。現時点では精一杯というところなんです。

(阿部) 前の実験番組の時と違って、同じ絵でも、意識を持って集めているから、何でも絵を入れてやれというのと大分違う。

(好本) ただ他の技術の人からの感想で、カメラマンなり音声なりで参加している人に言わせると、やや映像が多いという印象がある。もっと先生の話じっくりと聞きたいというふうに言っている感想もあったんです。

(阿部) あると思いますよ。ただそれは教科書の充実度によるんです。我々は教科書にかなり力を注いだわけですが、教科書に力を注いでいる方というのは大変少ないものですから、印刷ですむ部分が音になっている部分が多いということはあると思うんです。おそらくテレビというものの値段を考え、その映像のインパクトを考えたら、もっと映像部分が多くても決して不自然でない構成はとれるんじゃないでしょうか。

(好本) その辺の分量というのは、きっといろいろ試行錯誤をしていく中でいいパーセンテージというのは決まってくるんでしょう。ただ、量的に映像をもっと入れた方がいいのか、ちょうどいいのか、最後までわからなかった。事実としてあるのは、いつも時間がなかった。質問とかも、もう一言聞きたいんだろうなと思いつつ、司会者としては冷たく「次」とか言うのがあって、最後の時もゲストの方3人いらっしまったでしょう。1人のゲストの方など思わずムッとなさって、もっと話をしたかったという顔をしていらっしまった。時間がなかったのは事実なんですけれども、映像とのバランスでいってどれが一番いいのか最後までわからなかったです。

(藤原) その質問の部分、時間のバランスというのはどうなんでしょうか。

(司会) 映像とかゲストの話の時間から結局最後に残った時間が質問の部分で、なるべくそこは広げておこうとはしていたんですが。

(内田) 台本なんか御覧になると10分とか書いてあっても現実には押せ押せで、5分とかいうことが多かった。

(藤原) 討論とまではいかなかった。

(阿部) 討論は実際問題として無理でしょう。結局、今申し上げたように、テレビはモチベーション・ファクターとしての位置付ですから、そこで問題の提起があるというところまでで、あと考える。学生の力がすごく違うわけでしょう。テレビを使う限界というのはあるんじゃないでしょうか。ズバッと切り裂いていける腕前があれば別ですけど。そのところは難しい問題ですね。

(藤原) 印刷教材を見ると研究課題のところはかなり難しいテーマが並んでました。1回くらいそういうテーマをひっぱり出して、かなり長めの討論の時間をとってもよかったです。

(阿部) そういうのがあってもいいですね。

(司会) そこまでなかなかね。

(好本) 一つの方角としては、インタビュー番組の中であるように20時間とか、かなり長い間討論をさせて、その部分で特に面白い部分を放送するというの

があります。そういう方法があるいはあったかもしれませんね。

9. やってよかった

(司会) 番組としては、主任講師の意図がベースになっている。果たして全体を通して主任講師の意図というのは一体どういうことになったんだろうかということで、柳川先生にまとめていただきたいんですが。

(柳川) 主任講師というのは、阿部さんと私と両方ですから、両方の考えも違っておりますし、両方から聞いた方がよろしいでしょう。私が病気で休んでいるころから始まっているから、非常に準備の長さというのは感心しました。あきもせず、あきているんだろうけれども、何回も何回も、やはりあれが軸になったんだろうと思います。ですからゲストが割にじっくりしている場合が多かったと思うんです。土台作りの基礎というものをその前1年かそこらかけてやっているからそうなんだと思います。それから、好本さんの役割は非常によかったんです。普通、主任講師なるものが進行を務めなければならないわけです。そうすると、残りの時間ばかり気になって、何をしゃべっているのか、向うの言ったのを聞かないでしゃべったりする。司会者がいたために、そういうことがなかった。そのところが新しい試みだったと思います。普通でしたら、司会者が宗教学を知っている人間なんで、そうなるとかえって司会進行がその人の主観によって変わってしまったと思います。

(阿部) 僕は、たまたま半分宗教学から来て、これをやるようになったんです。もうひとつは、どうやっていけばいいのか考える役割というものがあったんです。むしろ、そっち側に考え方の枠があったものですから、大分ご無理をお願いして、相当強引なことをお願いした。内田さんにはご迷惑だったと思うんです。ずっと中に入って、宗教学の議論なんかおもしろくもないだろうに。それで、実を申しますと、こういうことをやって、放送大学の今の1本あたりの経費と、こういう仕掛をやってみて追加的な経費と合わせて考えてみると、それほど奇想天外にお金をかけなくても、あるリソースをうまく使えば、必ずしも先生がしゃべる大学の講義を流すだけでなくて、もっと新しいことを幅広くやっていくことは可能で

あるという自信を得たということは、今回の一番大きな成果だったと思うんです。宗教学でできたというのは、宗教学がマイナーディシプリンだから簡単にできたわけで、いきなり放送大学の半分とか3分の1の人が取るような科目でやりますと、いろいろ後が問題だと思えます。いきなりはできないわけで、一応こういう形でやれば出来るということが、今後の放送大学の運営にかなり役に立つのではないかと思っています。コースチームというけれど、その母体にするのに、日本の特性を考えると、何が一番役に立つかというと、やはり研究室というグループだと思うんです。よく言われることですが、日本というのはかなり村的な学問の傾向がある。これが素材として、今後使うのに考えていけるのではないだろうかというのがひとつです。もう一つは、普通の大学の講義に比べれば、放送大学の一番組あたりの経費というのは大変なお金なんです。45分の講義に200万円かけるなんていうのは、どこにもないわけですから。これを活かさない手はないわけでして、ちょっとした工夫を加えることによって、色々なことができる。しかもこれをインテグラルなパッケージにしていっていった場合に効果が上がる。宗教学でさえこの程度のことのできるのであれば、例えば語学、数学、そういうドリルを必要とするようなもの、インターアクティブな方法をパッケージに組みこんでいけば新しい方法は必ず可能であろう。しかも極度に金をかけなくとも、少し知恵を使って、少し尻をひっぱたいて、理論と頭脳を持った人を連れてくればできるんじゃないか。そういうことをやっていくといたしますと、やはり今回の実験というのは参加して下さった方は大変ご迷惑が多かったけれども、それなりの成果があったと思うんです。これは今後の教材開発、放送大学の中の一部でやっていかないといけない。これは決してモデルにはならないと思うんです。しかし、少なくともやればやれるという試行的な実験としては、一応の成果をあげたのではないかと考えているんです。

10. これから番組を作るみなさんに

(柳川) 最後に一つ。このセンターと初めてお付合したのは、あれも実験ですが鎌倉に行ったり、日本女子大でやったり、6通りやったところがありました。

どれでやってもダメだろうというのがかなり多かったんですけど、今度のはまた別の段階に踏み込んだわけです。せっかく皆さんをわざわざさせたものだからそういう6通りのものを今何と考えるのか、実験は終わったと考えるのか、あるいは現在の放送大学の講義が独演の方が多いとすれば、独演でやるとすればどういうやりかたがあるかという参考になるかということで、『MME研究ノート』の何号かにでてますね、あれをちょっと参考にさせていただくと。

(内田) あれは放送教育開発センターの一つの研究でして、シンポジウムでも発表したんですけども、仲々外の放送局とか放送大学でもできにくいことだと思うんですが、センターとしてはこれからも続けていくはずですよ。たまたま私の場合にはあれにも参加していたし、この番組なんかは、それを踏まえて実際の番組に活かしたというつもりは自分にはあるんです。これから、いまおっしゃったようにストレートトークだったらどういう形がいいのかとか、全部ドキュメンタリーなんていうことはありえないんで、いかに折衷で組みあわせていくかという問題もあると思うんです。これからも特にセンターでああいう研究をやりたいですね。

(柳川) やはり研究実験をやらないと。

(内田) ええ、実験なんです。

(阿部) ストレートトークの中で出てきたのは、前に生徒がいるのといないのによって、どれだけ生き生きしてくるか、ストレート型でやる時には非常に参考になることなんで。もっとみんなが信用するようなものをやらないといけないんです。

(司会) 今日は長い間どうもありがとうございました。

(1985.5.14.放送教育開発センターにて)